

---

# 日本ロシア文学会会報 第30号 2006年9月

1. 2006年度(第56回)定例総会・研究発表会日程 2. 7月理事会  
関連事項 3. 学会賞決定 4. 会員異動 5. 会誌編集委員会より

---

## 1. 2006年度(第56回) 定例総会・研究発表会 日程

第56回定例総会・研究発表会は、来たる10月21日(土)、22日(日)の両日、京都大学 吉田南総合館で開催されます。また、10月20日(金)には、プレシンポジウムが開催されます(詳細については下記をご参照下さい)。

研究発表会は、3会場41本の発表が予定されているほか、それらに並行して3本のパネルディスカッションが開かれます。それぞれの要旨はこの会報に掲載されていますが、プレプリントが9月21日頃に日本ロシア文学会のホ

ームページに掲載される予定ですので、ご参照下さい。

以下、日程をご確認の上、同封のはがきで当日のご予定を9月30日(土)までにお知らせいただくようお願いいたします。

なお、当日会場での録音、ならびに書籍等の販売を希望される方は、事務局までお申し出下さい。

### プレシンポジウム

#### ロシア文化の逆襲 SF 的、映画的、ミステリーのロシア

日時：10月20日(金) 18:30～20:30

場所：京都市国際交流会館 イベントホール

宮風耕治 氏「SFにどれだけの読者が必要か」(ロシア SF 研究家)

井上 徹 氏「映画における『大衆的なもの』とは何か」(ロシア映画研究家)

毛利公美 氏「ロシア探偵小説(ディテクチフ)を通して」(北大スラブ研究センター)

司会：越野 剛 氏(北大スラブ研究センター)

会場については、16頁の案内をご覧ください。

#### 懇親会のご案内

日時：10月21日(土) 18:30より

会場：京都大学

百周年時計台記念館 2階ホール

会場は吉田南総合館から徒歩5分ほどの場所です。

会費：5000円(予定)

院生向けの会費設定も検討中です。ふるってご参加ください。

参加ご希望の方は同封のはがきでお知らせ下さい。

## タイムテーブル

10月20日(金)	10月21日(土)					10月22日(日)					
	開会式 9:20-9:35										
		A	B	C	D会場		A	B	C	D会場	
	研究発表 1	9:40-10:10	[1]	[15]	[28]	研究発表 3	9:40-10:10	[8]	[22]	[35]	パネルディスカ ッション [ ] 9:40-10:50
		10:15-10:45	[2]	[16]	[29]		10:15-10:45	[9]	[23]	[36]	
		10:50-11:20	[3]	[17]	[30]		10:50-11:20	[10]	[24]	[37]	
		11:25-11:55	[4]	[18]	[31]		11:25-11:55	[11]		[38]	
	各支部総会	12:00-12:55				各種委員会	12:00-12:55				
	研究発表 2	13:00-13:30	[5]	[19]	[32]	研究発表 4	13:00-13:30	[12]	[25]	[39]	パネルディスカ ッション [ ] 13:00-14:30
		13:35-14:05	[6]	[20]	[33]		13:35-14:05	[13]	[26]	[40]	
		14:10-14:40	[7]	[21]	[34]		14:10-14:40	[14]	[27]	[41]	
	理事会	14:45-16:15									
18:00 開場	定例総会	16:20-18:00									
<プレシンポジウム> ロシア文化の逆襲 SF 的、映画的、ミステ リーのロシア 18:30-20:30	懇親会	18:30-									

研究発表

A 会場		題名	発表者	司会者
第 1 ブロック 10月21日(土)午前	[1]	9:40～10:10 「雪解け」前のソビエト詩 S・クラソヴィツキーの場合	長谷川 麻子	杉本一直 野中 進
	[2]	10:15～10:45 ナボコフの「自然な熟語」 「一流」のロシア語から「二流」の英語へ	秋草 俊一郎	
	[3]	10:50～11:20 繁茂する革命 世界の比喩としての植物	古川 哲	
	[4]	11:25～11:55 フセヴォロド・イヴァーノフの『ウ』における「新しい人間」のテーマについて	中澤 佳陽子	
第 2 ブロック 10月21日(土)午後	[5]	13:00～13:30 パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモスクワのイメージ	佐光 伸一	草野慶子 宇佐見森吉
	[6]	13:35～14:05 ロシア思想における性愛論とザミャーチン	佐伯 郁智	
	[7]	14:10～14:40 最初のブルガーコフ伝記とその顛末	石原 公道	
第 3 ブロック 10月22日(日)午前	[8]	9:40～10:10 遊歩者の形象とドストエフスキー作品	岡本(河原)法子	木下豊房 萩原俊治
	[9]	10:15～10:45 『カラマーゾフの兄弟』における相対的認識論について	小出 雅樹	
	[10]	10:50～11:20 『カラマーゾフの兄弟』における国家と教会の問題	木寺 律子	
	[11]	11:25～11:55 『作家の日記』における F.M.ドストエフスキーの女性論の諸相	佐藤 裕子	
第 4 ブロック 10月22日(日)午後	[12]	13:00～13:30 構成から見る「運命論者」再考	山路 明日太	金沢美知子 佐々木精治
	[13]	13:35～14:05 トレジアコフスキイによる作詩法の改革と18世紀の音楽	中澤 朋子	
	[14]	14:10～14:40 カンテミールとロシア詩法の現在 СТОПА 理論を検証する	角田 耕治	

研究発表

B 会場		題名	発表者	司会者	
第 1 ブロック 10月21日(土)午前	[15]	9:40 ~ 10:10	Прогноз перцептивных ошибок у японцев, изучающих русский язык	東シャトヒナ・ガンナ	村田真一 林田理恵
	[16]	10:15 ~ 10:45	Ознакомление с грамматическим материалом японских учащихся на уроке русского языка	クロチコフ、ユーリー	
	[17]	10:50 ~ 11:20	Методический опыт оптимизации процесса обучения русской разговорной речи по пособиям японских авторов	シヴァコーヴァ、ステラ	
	[18]	11:25 ~ 11:55	Лингвистические аспекты билингвизма	ロゴズナヤ、ニーナ	
第 2 ブロック 10月21日(土)午後	[19]	13:00 ~ 13:30	近代ロシア文章語形成期の諸作家における造語体系について ラヂシチェフ、カラムジン、プーシキンの場合	浦井 康男	佐々木照央 鈴木淳一
	[20]	13:35 ~ 14:05	ラジーシチェフの『人間論』再考	今仁 直人	
	[21]	14:10 ~ 14:40	.トルストイにおける 18 世紀の継承 L.スターンの『感傷旅行』と .トルストイの『幼年時代』	覚張 シルビア	
第 3 ブロック 10月22日(日)午前	[22]	9:35 ~ 10:05	ロシア語における身体所有者マーカーとしての「 + 生格」 与格との比較	水野 晶子	佐藤昭裕 三谷恵子
	[23]	10:10 ~ 10:40	現代ロシア語における <格融合> と <格階層> の相関性	野口 卓真	
	[24]	10:45 ~ 11:15	<動詞> <活動体名詞> の結合に現れる活動体名詞の複数主格形と同形の主格対格形について	南條幸弘	
第 4 ブロック 10月22日(日)午後	[25]	13:00 ~ 13:30	国境の認識 「北方領土問題」の始まり	有泉 和子	沼野充義 黒岩幸子
	[26]	13:35 ~ 14:05	帝政末期におけるボグロムとロシア知識人の反応	赤尾 光春	
	[27]	14:10 ~ 14:40	歴史改変小説に見る SF とリアリティの問題について	越野 剛	

研究発表

C 会場		題名	発表者	司会者	
第1ブロック 10月21日(土)午前	[28]	9:40~10:10	アレクサンドル・ドゥ(杜立福)長司祭の生涯	塚田 力	伊東一郎 坂内徳明
	[29]	10:15~10:45	中世ロシアにおける慣習と裁判 『ルースカヤ・プラウダ』を中心に	草加 千鶴	
	[30]	10:50~11:20	プイリーチカにおける現実性 <sup>リアリティ</sup> の表現 死人のプイリーチカを中心に	山田 徹也	
	[31]	11:25~11:55	1930~40年代ロシア農村の娯楽とバラライカ:コストロマ州ネレフタ地区の調査をもとに	柚木 かおり	
第2ブロック 10月21日(土)午後	[32]	13:00~13:30	記録する眼 グラフ雑誌『建設のソ連邦』における「白海 バルト海運河」のイメージ	江村 公	扇 千恵 大石雅彦
	[33]	13:35~14:05	バレエ・リュス研究:火の鳥の性	平野 恵美子	
	[34]	14:10~14:40	レーミゾフと「舞踊」	小椋 彩	
第3ブロック 10月22日(日)午前	[35]	9:40~10:10	現代ロシア文学と「フェミニズム」について	前田 しほ	小野理子 貝澤 哉
	[36]	10:15~10:45	1960年代の女性の散文について	高柳 聡子	
	[37]	10:50~11:20	ジギズムンド・クルジジャンフスキ『栞 Книжная закладка』研究	上田 洋子	
	[38]	11:25~11:55	フョードル・ソログープ『創造される伝説』	近藤 芙美子	
第4ブロック 10月22日(日)午後	[39]	13:00~13:30	ソヴィエト政府による公的記憶転換の試みとその挫折 「聖地」ソロフキから「矯正」ラーゲリへ	高橋 沙奈美	大平陽一 亀山郁夫
	[40]	13:35~14:05	ソヴィエトプロパガンダポスターの政治性と芸術性 グスタフ・クルーツィスの場合	大武 由紀子	
	[41]	14:10~14:40	ロシア特別教育における就学指導・教育相談のあり方をめぐって	白村 直也	

## パネルディスカッション

D 会場	タイトル	司会・パネリスト	企画責任者	備考
[ ] (21 日午前) 9:40-11:40	ポータブルな祖国：ユダヤ・ディアスポラの文化とスラヴ	司会：諫早勇一 報告：赤尾光春、樋上千寿 コメント：三谷研爾、安原雅之	楯岡 求美	120 分
[ ] (22 日午前) 9:40-10:50	ザミャーチン『われら』はいかにつくられているか	司会：木村 崇 報告：川端香男里、宮本宗実	木村 崇	70 分
[ ] (22 日午後) 13:00-14:30	「その後」のフォルマリストたち ロシア・フォルマリズム 再考	司会：野中 進 報告：中村唯史、佐藤千登勢、八木君人、野中 進 コメント：長谷川 章	野中 進	90 分

### 総会・研究発表会 会場案内（プレシンポジウム、懇親会については 16 頁をご覧ください）

開会式：共北 25 号室（2 階）

研究発表会 A 会場：共北 25 号室（2 階） B 会場：共北 26 号室（2 階） C 会場：共北 27 号室（2 階） D 会場：共北 31 号室

各支部総会 北海道支部：共北 34 号室（3 階） 東北支部：共北 35 号室（3 階） 関東支部：共北 25 号室（2 階 A 会場）

中部支部：共北 26 号室（3 階 B 会場） 関西支部：共北 27 号室（3 階 C 会場） 西日本支部：共北 36 号室（3 階）

理事会：共北 36 号室（3 階）

定例総会：共北 25 号室（2 階 A 会場）

各種委員会（いずれも 3 階） 会誌編集委員会：共北 3C 号室 学会賞選考委員会：共北 3G 号室 広報委員会：共北 34 号室

国際交流委員会：共北 35 号室 ロシア語教育委員会：共北 36 号室

事務局：共北 33 号室

休憩室：ベルラウンジ（1 階）、共北 3H 号室（3 階）

販売・展示：共北 3D 号室（3 階）

## A 会場・第 1 ブロック

### [1] 「雪解け」前のソビエト詩 S・クラソヴィツキーの場合

長谷川 麻子 [A-1 9:40-10:10]

「非公式詩」ともよばれる「雪解け」前後に誕生したソビエト現代詩については、日本でもこれまでにいくつかの論考によって紹介があった。なかでもスタニスラフ・クラソヴィツキーは、ソ連／ロシアという国が大規模な転換期を経験し今もつつあるように、「雪解け」直前に詩人からロシア正教神父となりその後ふたたび詩作を再開したという経歴の持ち主である。

今回の発表では、リアノーゾヴォ派からも参加があったモスクワ外国語大学の学生を中心とした詩サークルの活動を背景にしながら、クラソヴィツキーの活動を紹介する。

なお発表者の関心のひとつは、ヨシフ・プロツキーが試作上の師とも位置づけた人物としてのクラソヴィツキーにある。そうした観点からも、およそ 5 年間という短期間のうちに終わった初期創作の特徴と 80 年代創作再開後の作品を検討する予定だ。

### [2] ナボコフの「自然な熟語」「一流」のロシア語から「二流」の英語へ

秋草 俊一郎 [A-1 10:15-10:45]

従来のナボコフ研究において、初期のロシア語作品は派手で実験的な後期の英語作品に比較して研究で後塵を喫していた。また日本においてもそのロシア語作品はナボコフ自身の英訳を通じて英文学者によって翻訳紹介されてきたといった事情もあり、正当な評価がされているとは言いがたい。しかしナボコフは『ローリータ』と題された本について「私のアメリカの友人たちは私のロシア語の本を読んでおらず、それゆえ私の英語の本の表現力への評価はどれも的外れなものにならざるをえない」とはっきり述べており、そのロシア語を正しく評価することはその英語の評価にも直結する重大な問題なのである。同じ文章でナボコフは「自分の個人的な悲劇とは [中略] 私が自然な熟語や [中略] を捨て、二流の英語に乗り換えねばならなかったこと」と述べるが、本発表ではその「自然な熟語」に着目し独特な用法を解説することでナボコフのロシア語の評価の一端としたい。

### [3] 繁茂する革命 世界の比喩としての植物

古川 哲 [A-1 10:50-11:20]

プラトーフ作品においては、放浪することによって進行中の革命を観照する登場人物がよく出てくる。それは、革命の能動性の検討のために、まずは受動性が肯定されていることの一側面である（学会誌 37 号参照）。今回の発表で指摘されるのは、そのとき観照される世界、具体的には自然の側も、プラトーフ作品においては独特の現れ方をするということである。プラトーフにおいては、自然は、人間の介入を受け入れつつ人間の能力を凌駕するようなものとして描かれ、そのようなものとして肯定されている。ソビエト期の小説における自然は、人間と調和的な関係にあったり、克服の対象であったりするが、プラトーフにおける自然はその両方から逸脱している。そのことが、本発表では、1920～1930 根年代のプラトーフ作品における植物の比喩および形象、およびそれらがプロットにおいてもつ意味を考察することで、具体的に検討される予定である。

### [4] フセヴォロド・イヴァーノフの『ウ』における「新しい人間」のテーマについて

中澤 佳陽子 [A-1 11:25-11:55]

今回の発表では、フセヴォロド・イヴァーノフの『ウ』（1933）に登場する 2 つの「王冠」のイメージが、不死を達成する新しい人間というテーマを象徴していることを指摘する。論者は以前にも、『ウ』における「王冠」のイメージが象徴するテーマについて論じたことがあり、今回の発表は以前の発表の内容を大幅に修正するという目的も持っている。

『ウ』では、作品舞台の遠景として救世主キリスト寺院のドームがしばしば言及される。この寺院は、作品の時代背景となった 1931 年には、新政権の反宗教政策の結果爆破された。『ウ』では作品の冒頭で寺院の爆破が述べられ、「崩れた」と語られるものの、その後作品空間の中で寺院は立ち続けている。この寺院のイメージを分析の出発点として、作品を論じていきたい。

## A 会場・第 2 ブロック

### [5] パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモスクワのイメージ

佐光 伸一 [A-2 13:00-13:30]

パステルナークの『ドクトル・ジヴァゴ』（1955）におけるモスクワ・イメージについて報告する。作中では革命、戦争などの歴史的事件を通したリアリスティックな同時代のモスクワ描写が行われると同時に、モスクワをロシアの使命や運命の担い手という象徴性を込めて提示している。

リアリズムと象徴性という両義性は作品全体にわたる構成原理となっているが、前者は彼が指向した 19 世紀長編小説と、後者はこの作品の大きなモチーフであるキリスト教やフォークロアの世界と深く関係している。例えば作中でローマや古代ローマ人が度々言及されるように、「モスクワ＝第 3 のローマ」というイメージがモスクワには与えられている。

発表ではトルストイの『戦争と平和』を初めとするロシア文学におけるモスクワ・イメージとの比較、作中でのモスクワをめぐる神話やフォークロアなどの分析を通しパステルナークが「モスクワ」に込めたイメージを考察する。

### [6] ロシア思想における性愛論とザミャーチン

佐伯 郁智 [A-2 13:35-14:05]

十九世紀末から二十世紀初頭にかけてロシアにおいて行われた性愛に関する議論について、この議論がザミャーチンにおいても大きな関心の対象であったことを指摘し、それが作家においていかに引き受けられ、展開されているかについて検討したい。

まず、ロシア思想における性愛論を、これをソロヴィヨフ、ベルジャーエフに代表される「個の性愛論」とローザノフに代表される「種の性愛論」の二つの論点に分ける整理を試みる。こうした議論とザミャーチンとの関係を論じるにあたり、本発表では彼の最もよく知られた小説『われら』を主たる分析の対象として取り上げる。ソフィア、両性具有といった上述の思想家たちの性愛論におけるキー・イメージが、そこでいかにとりあつかわれているかを明らかにし、ザミャーチンにおける性愛の問題を、最初にまとめた思想史における二つの論点とのかわりから論ずる。

## [7] 最初のブルガーコフ伝記とその顛末

石原 公道 [A-2 14:10-14:40]

1940年3月10日、M.ブルガーコフ死亡。直後に作品遺産顕彰会が設立され、ソ連作家同盟のファージェエフがその先頭に立った。モスクワ芸術座で上演され、好評を博していた『トルヴィン家の日々』や『最後の日々』等の戯曲集出版を計画、それにブルガーコフの伝記を付すこととなった。著者は1920年代後半から知り合い、生涯の親友パーヴェル・ポポフ。ロシア文学研究所プーシキン館で、トルストイ、ドストエフスキー、チャーホフ等の全集刊行の仕事に携わり、後にモスクワ大学の哲学科の教授。40年中に書かれたその最初のブルガーコフ伝記は未亡人エレナに渡されたが、戯曲集は出版されず、顕彰会も立ち消え状態で終わった。ブルガーコフの作品の解禁は、1956年を待たなければならなかったが、この伝記の発表はさらに遅れて1989年であった。この間の状況を考察する。

## A 会場・第3ブロック

### [8] 遊歩者の形象とドストエフスキー作品

岡本(河原)法子 [A-3 9:40-10:10]

フランス語で街をぶらぶら歩きまわる人間を意味するフラヌール(flâneur)という語は、ロシアでは19世紀に用いられるようになり、フラニョール(фланёр)という語があてられるようになった。ドストエフスキー作品でこの語は『主婦』や『罪と罰』等で用いられており、この語が直接使用されていない場合でも、目的もなく都市をさまよう遊歩者のような主人公がしばしば登場している。一方、都市をさまよう主人公の姿はディケンズやポーの作品にも描かれていたものだった。40年代にドストエフスキーが描いた遊歩者たちは、都市をぶらつきながら雑踏を観望しようとする点で、同時代に描かれた遊歩者の特徴を共有している。さらに後期作品では、これまで雑踏に向けられていた視線が内面かし、主人公たちは物思いにふけりながら街をさまよいはじめ、遊歩者のこのような変化は、都市の急激な発展に起因するものと考えられる。

### [9] 『カラマーゾフの兄弟』における相対的認識論について

小出 雅樹 [A-3 10:15-10:45]

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の作品内には、ある認識の成立する原理が二項の差異化であり、したがって相対的なものであるという立場が散見されるように思われる。例えば、善は悪との相関関係によって成立するし、また相互作用によってその位置はことあるごとに入れ替わる。なにものによっても覆されることのない絶対的な善があって、悪がその見地から排除される、という図式は見られない。そこでこの作品の登場人物がこの相対的認識論に対してどのような態度をとっているかを示した上で(主として大審問官、ゾシマ長老)このことが小説の大きなテーマと結びついていることを実証する。また相対的認識論から、他者との差異によるのみ自己認識が可能であるという立場についても、具体的に論じたい(ドミートリーとカテリーナ・イヴァーノヴァ)。

### [10] 『カラマーゾフの兄弟』における国家と教会の問題

木寺 律子 [A-3 10:50-11:20]

『カラマーゾフの兄弟』の小説の前半部分で、イヴァン・カラマーゾフは家族とともに修道院を訪問するが、そこで自分の国家と教会の問題に関する思想を語る。イ

ヴァンによると、現状では教会は国家の一部であるが、本来はあらゆる国家が教会とならなくてはならない。そうすれば、犯罪者は国家による刑罰のためではなく、教会に対して罪を自覚することとなる。それに対してゾシマ長老は現在でも国家によって罰せられる犯罪者を教会に対して罪を自覚するのだと説明する。父殺しの事件の後、ドミートリーの裁判では弁護士フェチュコーヴィチがロシアにおける裁判のあり方を語り、刑罰のみならず救済が必要であることを訴える。西欧の歴史において、国家と教会の関係は多く論じられてきた問題であるが、これがイヴァンやドミートリーの心理的な罪責意識とどのように関わっているかを考察する。

### [11] 『作家の日記』における F.M.ドストエフスキーの女性論の諸相

佐藤 裕子 [A-3 11:25-11:55]

ドストエフスキーの『作家の日記』には、作家の思想を読み解く上で重要な、政治・社会評論や芸文批評、また、随筆および短編小説等が収められている。追憶の形で語られる告白や宗教論など作家の本質に関わるテーマが語られる一方、時事批評など、社会への発言を常に意識していた作家は、当時のアクチュアルな問題のひとつとして、何度か女性論を取り上げている。トピックだけでも、「確実な民主主義。女性」、「ジョルジュ・サンドの死」、「ジョルジュ・サンドについて数言」、「ふたたび女性について」、「現代女性に恩恵を受けた者の一人」、「未来のロシア女性の確かな運命」等がある。また、プーシキン論やアンナ・カレーニナ論に語られるヒロイン論、短編小説「おとなしい女」においても、作家の女性観が顔をのぞかせている。当時の19世紀後半のロシアにおける女性論を概観し、『作家の日記』に記された、ドストエフスキーの女性論を分析する。

## A 会場・第4ブロック

### [12] 構成から見る「運命論者」再考

山路 明日太 [A-4 13:00-13:30]

『現代の英雄』の「運命論者」は、他の章とは切り離され単独に論じられることが多い。とりわけ章末のペチョーリンの発言を「意志による運命の克服」と捉え、肯定的に読み取る解釈もある。

だが「運命論者」を小説全体の中で考察すると解釈は異なってくる。「運命論者」は最終章にあるのだが、時系列上主人公の人生は続いており、克服されたはずの運命がなお彼を苦しめているかのように見える。主人公の生き方に対するレールモントフの皮肉な眼差しは、このような小説構成にも表れている。

本発表においては、小説の構成と時系列とを対比してみる。そして構成上「運命論者」を最後に置いた意味を考察し、この章と時系列上再構成された前後の出来事との繋がりを解明する。またレールモントフが『現代の英雄』執筆時期に獲得していた心境の転換を晩年の詩作品に探り、作者とペチョーリンとの関係についても触れることになる。

### [13] トレジアコフスキーによる作詩法の改革と18世紀の音楽

中澤 朋子 [A-4 13:35-14:05]

18世紀初頭に行われたロシア作詩法の改革についてはもうすでに多く議論がなされており、今日のわれわれの知るところとなっている。それでは、B.K.トレジアコフスキー(1703-1769)によって唱えられたとされる「音節力点詩法」という概念は、そもそもどのような経路を辿ってもたらされたものなのであろうか。たとえば、彼が書いた「詩」のなかには旋律をつけられて歌われていたものも多くあったと言われている。このように、彼の



詩が同時代の声楽と密接に結びついていたという事実を考慮に入れながら、彼がいかにして「音節詩法」に「力点詩法」を組み合わせるという着想を得たのかを探りつつ、ロシア詩の形式の歴史的流れについて再検討する。

#### [14] カンテミールとロシア詩法の現在 СТОПА 理論を検証する

角田 耕治 [ A-4 14:10-14:40 ]

音節アクセント詩法の確立にあつては、トレジアコフスキ『新簡約ロシア詩作法』(1735)が стопыの概念を導入し、ロモノソフ『ロシア詩法に関する書簡』(1739)がこれを方法論として完成した。ところで近代ロシア詩法の黎明期に стопыに言及した詩人がもう一人いた。A. Д. カンテミール(1708-44)のいうなれば「もう一つの手紙」、『ロシア詩法に関するハリトン・マケンチンの友人宛書簡』(1743)には、一見この стопыをまっ向から否定する発言がみられる。

報告では「stopa」のテルミノロギヤ、カンテミール発言、二十世紀詩学にみる стопыへの懐疑を洗いなおしてロシア詩法における стопы理論の意義を検討する。最終的には、マヤコフスキ、ツヴェターエヴァらによる二十世紀のアクセント詩法とははたしてなだったのか、ということまで触れられたらと考えている。

## B 会場・第1ブロック

#### [15] Прогноз перцептивных ошибок у японцев, изучающих русский язык

東シャトヒナ・ガンナ [ B-1 9:40-10:10 ]

Зная строй фонологических систем двух контактирующих языков, лингвист может предсказать сферу потенциальной интерференции, что, в свою очередь, послужит основой для научных рекомендаций по ликвидации акцента при обучении произношению, а также при обучении аудированию на неродном языке.

Хотелось бы подчеркнуть, что данные бинарного сопоставительного анализа двух языков должен хорошо знать учитель.

Сопоставление с родным языком, используемое непосредственно на уроках русского языка, не всегда дает желаемые результаты: оно зачастую не снимает, а, наоборот, усиливает интерференцию. Интерференция для учащегося снимается не путем сопоставительного анализа двух языков в ходе самого учебного процесса, а путем упражнений и инструкций, составленных с учетом трудностей изучения русского языка с точки зрения изучающего.

В фонетическом плане сопоставление японского и русского языков интересно тем, что фонетические системы этих языков достаточно далеки друг от друга.

В докладе будут приведены основные различия русской и японской фонетических систем, рассмотрены черты японского акцента в области гласных и согласных (на уровне порождения и восприятия японцами русской речи).

Результаты настоящего исследования можно использовать в теоретических курсах общего языкознания и для усовершенствования методики преподавания русского языка как иностранного (курс лекций для преподавателей РКИ).

Данная работа может стать отправной точкой для ряда новых работ по японско-русской интерференции.

#### [16] Ознакомление с грамматическим материалом японских учащихся на уроке русского языка

クロチコフ、ユーリー [ B-1 10:15-10:45 ]

Конкретные способы работы с грамматическим материалом на уроке устанавливаются в зависимости от ряда факторов. Важно учитывать, какого рода действия и операции будут выполнять японские учащиеся с предлагаемым материалом в процессе речевого общения на русском языке и какова цель введения грамматической единицы, отражаемая в используемом учебнике или учебном пособии.

В методической практике при работе с японскими учащимися применяются следующие основные способы ознакомления с новым грамматическим материалом:

- 1) объяснение преподавателя либо объясняющий текст учебника;
- 2) разнообразные средства наглядности (схемы, таблицы, теоретические комментарии, предметная, картинная наглядность, моторно-двигательная и ситуативная наглядность);
- 3) использование специально подобранных примеров (их наблюдение и анализ), контекста, речевых образцов, применяемых как для наблюдения и анализа, так и выполнения действий по аналогии.
- 4) презентация нового грамматического материала может осуществляться в процессе выполнения определенных упражнений, направленных как на выработку, так и закрепление фонетических и одновременно грамматических навыков японских учащихся начальном этапе изучения русского языка.

Значительное различие в системах русского и японского языков, наличие многих новых и трудных для японских учащихся языковых понятий повышает важность объяснения. В то же время при работе с японскими учащимися трудно и даже невозможно отдать предпочтение какому-либо одному способу ознакомления с новым грамматическим материалом. Обычно способы презентации в преподавательской деятельности применяются комбинированно.

#### [17] Методический опыт оптимизации процесса обучения русской разговорной речи по пособиям японских авторов

シヴァコーヴァ、ステラ [ B-1 10:50-11:20 ]

Великий русский педагог К.Д. Ушинский говорил, что при хорошем учебнике и благоприятной методике и неопытный преподаватель может быть хорошим, а без того и другого даже лучший преподаватель не выйдет на настоящую дорогу.

В данном докладе речь идет о:

А. 10-летнем методическом опыте работы по пособию Д. Сато: «Вводный курс русского языка. Новая редакция», изд. NHK, которое неизменно получает высокую рейтинговую оценку учащихся. Приводится краткий сравнительный анализ данного учебника с существующими аналогичными пособиями других японских авторов.

В. Показано как авторская методика преподавания влияет на активность и заинтересованность учащихся, ибо она, 1) ориентирована на социально-культурную сферу деятельности студентов; 2) учитывает основные мотивы выбора русского языка: интерес к русской культуре и личный.

С. Рассмотрены 3 компонента формирования межкультурной языковой коммуникации как конечной

цели обучения русскому языку по данному пособию:

- I. Коммуникативно-методическая компетенция;
- II. Лингво-методическая компетенция;
- III. Учебно-методическая компетенция.

[18] Лингвистические аспекты  
билингвизма

ロゴズナヤ、ニーナ [B-1 11:25-11:55]

Билингвизм становится нормой современной коммуникации. Языковая ситуация постоянно меняется вместе с окружающим миром, меняет не только язык, но и заставляет пересматривать подходы к его обучению и изучению.

При изучении иностранного языка в недетском возрасте возникает лингвистическая проблема, мешающая его усвоению – интерференция, которая пронизывает все языковые ярусы, сама превращаясь в систему, называемую интерязыком.

По мнению Селинкера Л. только 5% людей, изучающих иностранный язык достигают результатов, близких к координативному билингвизму, т. е. 95% изучающих остается на уровне интерязыка, способного существовать в трех состояниях:

1. очищения от суррогатных примесей;
2. окостенения, функционирования без изменения при достижении определенного уровня;
3. отмирания в силу его не востребоваемости.

Первое состояние интерязыка: очищение от суррогатных примесей наиболее встречаемое явление в аудиторной практике.

Возникает правомерный вопрос: к каким эффективным мерам, способам нужно прибегнуть, чтобы «очищение» проходило быстрее и эффективнее?

Ответ на этот вопрос кроется в новой методике межязыкового обучения, основанного на исследовании и описании интерязыков, возникающих при языковом контакте.

Билингвальные модели обучения, основанные на функциональном подходе к обучению, в своей основе представляют сопоставительные (параллельные) учебные материалы.

Всё, что лингвистично, должно стать достоянием методики, а всё, что неметодично, должно уйти из практики.

## B会場・第2ブロック

[19] 近代ロシア文章語形成期の諸作家における造語体系について ラヂシチェフ、カラムジン、プーシキンの場合

浦井 康男 [B-2 13:00-13:30]

近代ロシア語形成期の語彙的・文体的変化の研究を進めている発表者は、上記三者の代表的な作品について、コンコーダンスと語彙統計を作成したが、現在これらのデータをコンピューター上で重ね合わせて、比較を行っている。三者で重なった部分の語彙は、ロシア文章語の中核的な語彙に、また重ならない部分は、各々の作家に固有の語彙である可能性が高いが、この作業によって、これまでは印象批評に基づいていた各作家の語彙的特徴が、具体的なデータによって明らかになると思われる。

ただ具体的な意義を持つ語は、テーマによってその頻度が大きく変わるため、単なる頻度の比較では意味をなさないことが多い。語の意義に左右されずに、三者の語彙体系と語彙の拡充方法の相違を形式的に評価する方法として、本研究では、接辞による語の派生関係に焦点を当て、この面から検討した。なお発表は時間的制約もあり、行為者名詞に重点をおく予定である。

[20] ラジーシチェフの『人間論』再考

今仁 直人 [B-2 13:35-14:05]

A. ラジーシチェフの哲学的名著『人間論、その死と不死について』がもつ思想的意味を考える。この著作の解釈をめぐるのは、歴史的に鋭い対立が生じてきた。この対立はソ連の思想史学を中心としたイデオロギー上の制約を背景としていたが、それ以前に作品自体の内容と構成に起因するものであったといえる。全体の四部構成のうち、専制や農奴制の批判といった、著者の政治的急進性と一見よく符合するかに思われる唯物論的・感覚論的立場の叙述は前半の二部にとどまり、後半は観念論的・理性論的立場からの靈魂の不死の主張に充てられているのである。このことが、著者は唯物論者か観念論者か、自然主義的か形而上学的かといった基本的な論点にさえ争いの余地を残すことにつながった。本報告では、とくにラジーシチェフの政治・法思想との連関、およびヨーロッパ思想史との関係においてこの作品を捉えながら、改めて一つの読み方を提示してみたい。

[21] A. トルストイにおける18世紀の継承 L. スターンの『感傷旅行』と . トルストイの『幼年時代』

覚張 シルビア [B-2 14:10-14:40]

L. トルストイが、18世紀の伝統を継承する作家であることはしばしば指摘される。若き日に大きな影響を受けた文学作品のリストに、J.J. ルソーの『告白』、『エミール』、『新エロイズ』や、L. スターンの『感傷旅行』が含まれていることにも、トルストイと18世紀文学との関係が無視できない意味を持つことが窺い知れる。トルストイは、ルソーからその教訓主義、自然崇拜、文明に対する懐疑的態度を受容し、スターンからは文学的手法を学んだ。彼は、スターンの『感傷旅行』の翻訳と、処女作である『幼年時代』の執筆を同時期に行っており、手法の上からも大きな影響関係があることは間違いない。ただ、こうした影響関係についての断片的な言及はあるにもかかわらず、テキストの比較がなされることは極めて少ない。『感傷旅行』と『幼年時代』の比較を軸に、スターンの作品が、トルストイの創作傾向の形成にあたって占めた位置を追及する。

## B会場・第3ブロック

[22] ロシア語における身体の所有者マーカ―としての「y + 生格」 与格との比較

水野 晶子 [B-3 9:40-10:10]

ロシア語における「y + 生格」による所有者表示は、通時的には「与格」による所有者表示が制限される過程でそのシノニムとして使用域を広げてきたものだとされている。この与格による所有者表示の「y + 生格」へのシフト現象は、主格や前置格に置かれた名詞句のみにとどまらず、対格の名詞句にも拡大傾向にあることが指摘されている。しかし、19・20世紀文学テキストを言語資料として「AガPノ身体ニVスル」表現における身体所有者マーカ―としての「y + 生格」の使用を観察すると、その使用の変遷過程は必ずしもその使用の拡大を支持するものではない。本発表では、19・20世紀文学テキストにおいて「与格」と「y + 生格」の並行使用が観察される動詞における両マーカ―の使用の変遷や個人差に言及しながら、身体所有者マーカ―としての「与格」と「y + 生格」が現代の形でそれぞれの使用域を差別化してきた道筋を一つの仮説として提出する。

## [23] 現代ロシア語における〈格融合〉と〈格階層〉の相関性

野口 卓眞 [ B-3 10:15-10:45 ]

現代ロシア語における一般的な格は全部で六つであるが、一つの語に六つの格が形態的に区別されることはなく、必ず一定の格同士が同じ形式になっている。この現象は格融合 (падежный синкретизм) と呼ばれ、そのパターンは非常に多様である。例えば、男・中性名詞単数では生物・無生物名詞の区別によって主・対格、生・対格融合を使い分け、それに対して女性名詞単数では一貫して与・前置格融合であるように、様々な条件下で異なった格融合が発生する。

そこで本発表は、このように条件によって変化する格融合が一定の規則性に支配されているという観点に立つ。発表内容では、格階層 (падежная иерархия) と呼ばれる、格をある特徴に従って一定の順列に配する概念を用いて、多様な格融合のパターンを総括的に分析できるという仮説を立て、その妥当性を検証する。

## [24] 〈動詞〉 〈活動体名詞〉 の結合に現れる活動体名詞の複数主格形と同形の主格対格形について

南條幸弘 [ B-3 10:50-11:20 ]

現代ロシア語の名詞の対格形は、通常、単数形 (語尾が -a, -я で終わる男性名詞は除く) と複数形 (男性名詞、女性名詞、中性名詞) では、名詞が活動体名詞であるか不活動体名詞であるかによって異なる。本発表では、〈動詞〉前置詞 B <活動体名詞〉 という結合で現れる活動体名詞複数主格形と同形の対格形、および活動体名詞複数生格形と同形の生格対格形を対象とする。本発表の目的は、先行研究をロシア語ナショナルコーパスの検索用例によって検討し、活動体名詞にかかる一致定語の形容詞が性質形容詞であるか、関係形容詞であるかという側面からどのような意味の違いが表されるかを探ることである。複数主格対格形の活動体名詞は対象が集合的に、複数生格対格形の活動体名詞は個別的に捉えられとする先行研究、複数主格対格形の活動体名詞にかかる一致定語は関係形容詞が多く、複数生格対格形の活動体名詞にかかる一致定語は性質形容詞が多いという結論を得た。

## B 会場・第 4 ブロック

### [25] 国境の認識 「北方領土問題」の始まり

有泉 和子 [ B-4 13:00-13:30 ]

我国政府は北方四島の領有正当性の根拠を江戸時代まで遡っている。

その主張の主なところは、一、1644 年 (正保元年) 幕府作成の絵図に「くなしり、えとほろ、うるふ」等の名が記載、二、1785 年 (天明 5 年) 及び 1791 年 (寛政 3) 最上徳内等の蝦夷地派遣、三、1798 年 (寛政 10) 近藤重蔵・最上徳内等が国後・択捉に渡海、択捉に「大日本忠登呂府」の標柱を建て、1799~1800 年、重蔵・嘉兵衛等の国後・択捉再渡海、択捉に漁場を開き、幕史を置き、1800 年、嘉兵衛のエトロフ航路開設、四、1855 年 (安政元年) 伊豆下田における日魯通好条約締結で両国国境が択捉と得撫の間に引かれ、さらに展開は 1875 年 (明治 8) 樺太千島交換条約以降に続くとしている。

だが、下田条約以前の幕府にそこまで明確な国境画定意識があったのかどうか、また、一方、ロシア人の認識はどの程度のものであったのか。

報告者は、主にゴロヴニン事件時の幕府の国境認識、ロシアを含むヨーロッパ作成の地図の有様、および、当時のロシア海軍軍人の認識を例に取り、政治的発言を避けつつ、両国の北方認識の始まりに言及したい。

## [26] 帝政末期におけるボグロムとロシア知識人の反応

赤尾 光春 [ B-4 13:35-14:05 ]

帝政末期に断続的に起きたボグロム (ユダヤ人虐殺) をめぐってロシアの知識人階層の間で抗議活動が精力的に展開された事実はあまり知られていない。本報告では、ロシア知識人の一部で展開されたユダヤ人擁護の言論活動を概観し、その社会思想的意義の解明に向けた考察を行う。

本報告では、ユダヤ人の擁護においてことに重要な役割を果たしたコロレンコ、ゴーリキー、ウラジーミル・ソロヴィヨフ、レフ・トルストイの 4 人に焦点を当てる。上記 4 人の言論活動とその思想的背景の比較を通して、ボグロムを契機として形成された「ロシア問題としてのユダヤ人問題」というパラダイムが彼らの活動を支えた主たる思想的根拠であった点、また、こうしたパラダイムの浸透の度合いが彼らのユダヤ人擁護の徹底性とその限界を示す指標となっていた点などを明らかにする。

## [27] 歴史改変小説に見る SF とリアリティの問題について

越野 剛 [ B-4 14:10-14:40 ]

ペレストロイカ末期およびソ連崩壊後の「歴史の見直し」の動きと結びついて、「もうひとつの歴史 (альтернативная история)」あるいは歴史改変小説と呼ばれる SF ジャンルが多く書かれるようになった。これは歴史上のどこかの時点で「もしあのときこうなっていたら」という分岐点を設けて、架空の歴史を描くものである。今回の発表ではパーヴェル・クルサノフ (Павел Крусанов) の『天使に噛まれて』(Укус ангела, 2000) とヴァチエスラフ・ルイバコフ (Вячеслав Рыбаков) の『没有坏人: ユーラシア交響曲』(Плохих людей нет: Евразийская симфония, 2000-) シリーズを取り上げる。どちらの作品もロシアと中国を融合したようなユーラシヤ的な帝国の架空の歴史を描いている。歴史改変小説の流行に垣間見える「帝国への郷愁」ともいうべき傾向を分析する。

## C 会場・第 1 ブロック

### [28] アレクサンドル・ドゥ (杜立福) 長司祭の生涯

塚田 力 [ C-1 9:40-10:10 ]

アレクサンドル・ドゥ (杜立福、Александр Дэ) 長司祭は、1923 年、北京の正教徒共同体でロシア系 18 世の中国人として生を受けた。1950 年には北京および中国の大主教ピトルから司祭に叙聖され、後には長司祭を任じられた。

1960 年代には政治的な理由から投獄され、その後も長らく宗教活動に制限を受けた。のち、1993 年には『わが国におけるロシア正教の興衰』の一文を羅栄禄と共著した。終生信仰を保ち、2000 年以降は中国で最後の正教会聖職者としていくつかの取材を受け、2003 年の逝去の際には海外からも多数の参列者が葬儀を訪れた。

本報告では、アレクサンドル・ドゥ長司祭の生涯を辿りつつ、20 世紀の北京のロシア正教会が置かれていた状況を概括する。北京の中国政府の宗教政策とロシア正教会をめぐる状況の一端を明らかにし、北京における正教会聖職者の宗教思想についての一端を明らかにしたい。

[29] 中世ロシアにおける慣習と裁判 『ルースカヤ・プラウダ』を中心に

草加 千鶴 [C-1 10:15-10:45]

ロシア最古の成文法とされる『ルースカヤ・プラウダ』(Русская Правда)は、この時代の裁判の基準を示す重要な文献の一つである。この文献は慣習法を基礎として11世紀から段階的に成立した世俗法の集成であり、裁判の指針として何世紀にもわたって使用され、その後のロシアにおける法典編纂の典拠の一つとなった。刑事分野では「血の復讐」から金銭による賠償への変遷が見られる。一方、民事分野では金銭による賠償のほかに、裁判における真偽の判定方法として宣誓や神判も重要な役割を果たしたことが見て取れる。

本発表では、中世ロシアにおいて慣習が公によって制限されてきた過程と、この時代の裁判の方法について考察する。

また『ルースカヤ・プラウダ』と同時代のいくつかの文献を取り上げ、中世のロシアにおいて宣誓や神判はどのような場合において用いられ、またそれは具体的にはどのように行われたかについても比較検討したい。

[30] フィリーチカにおける現実性(リアリティ)の表現 死人のフィリーチカを中心に

山田 徹也 [C-1 10:50-11:20]

フィリーチカとは、「不可思議」な何らかの事件、出来事について語られた民話であり、ヴォジャノイやドモヴォイ、レーシイなどの妖怪が登場する話や魔女の話、死者が現れたと語られる死人の話、そして夢や予兆に関する話などが含まれる。また、このフォークロア・ジャンルにおいては、起きた出来事を「不可思議」な、「非日常的」なことだとしながらも実際にあったこととして語られるところに大きな特徴がある。

今までフィリーチカを扱った研究では、語りの中にあられる民間信仰や分類などに関心が集まり、ジャンルとしてのメカニズムや構造にはほとんど注意が払われてこなかった。本発表においては、ひとつの例として死人のフィリーチカを取り上げ、それを中心にフィリーチカで語られる「不可思議な」出来事が、実際に起きた事柄として語られる際、どのように表現されるのかに関して論じていく。

[31] 1930～40年代ロシア農村の娯楽とバラライカ：コストロマ州ネレフタ地区の調査をもとに

柚木 かおり [C-1 11:25-11:55]

本発表は、2001～03年のコストロマ州ネレフタ地区でのフィールドワークで得られたデータ(証言、演奏など)をもとに、1930～40年代のヨーロッパ・ロシア中部の一農村における娯楽、特に音楽が関連する娯楽の行われ方を、ロシアの代表的な楽器として知られているバラライカを中心に再現し、叙述するものである。20～30年代生まれのインフォーマントたちは子供・青春時代の記憶を年代とともに鮮明に覚えており、彼らとの対話によって、私たちはこれまで文書には記されてこなかった文化の歴史を知ることができる。当該地区はソ連の文化政策が適応されたがその影響をさほど強くは受けておらず、ソ連以前の状況、ソ連時代にとられた政策、その結果について大変可視的な様相を呈しているという意味で、当該時代のロシア農村のみならず、ソ連の文化政策の実例を提供することができるだろう。

## C 会場・第2ブロック

[32] 記録する眼 グラフ雑誌『建設のソ連邦』における「白海—バルト海運河」のイメージ

江村 公 [C-2 13:00-13:30]

グラフ雑誌『建設のソ連邦』は、1930年から1941年半ばまで月刊で発行されたプロパガンダ雑誌である。その1933年12号「白海—バルト海運河建設」特集号をロトチェンコが担当した。リシツキイもまた、この雑誌の編集に関わっていたことが有名だが、通例、匿名の写真家が撮影した写真を別のデザイナーが編集するという手法を取っていた。しかし、「白海—バルト海運河建設」特集号において、ロトチェンコは現地に赴いて撮影を行い、自ら編集を行っている。

1930年代初頭のソ連という国家にとって「運河」とは、社会的・政治的・美的なさまざまな潮流がひとつに収斂する場であったといえる。本発表では、この雑誌のロトチェンコの写真による運河の表象を編集前の写真とともに分析し、その手法を検討する。そして、「ファクト(事実)」をめぐる当時の文学における議論を参照し、「事実」を記録し、収集し、編集することの意味を考察する。

[33] バレエ・リュス研究：火の鳥の性

平野 恵美子 [C-2 13:35-14:05]

初期バレエ・リュスにおいて、「ロシア的」なバレエと呼べる作品は主に3つある。「火の鳥」(1910)、「ペトルーシュカ」(1911)、「春の祭典」(1913)だ。「ペトルーシュカ」の深い心理描写や「春の祭典」の革新性に対し、「火の鳥」は内容にやや深みが欠け、幼稚な印象を与えるかもしれない。

バレエ・リュスは西欧で大変な人気を博したので、ディアギレフは観客の期待に応え、「ロシア的」なバレエを上演する必要があった。だが「火の鳥」は西欧の熱狂的なロシア・ブームだけによって生まれたのではない。その根底にはロシア芸術におけるネオ・ナショナリズム運動との深い関係がある。

バレエ「火の鳥」は民話から生まれたが、民話とバレエでは異なる構造の人物関係が見られる。ロシア民話から生まれた「火の鳥」にどのような新しい解釈が可能なのか、特にイワン王子、エレナ王女、火の鳥の三者の關係に着目して考察する。

[34] レーミゾフと「舞踊」

小椋 彩 [C-2 14:10-14:40]

旧教徒に並々ならぬ関心を抱き、指導者アヴァクームに心酔したレーミゾフは、グノーシスやフリーメーソン、タルムードの熱心な研究者でもあった。彼の創作の「舞踊」のモチーフとは、自らも秘密結社を創始し活動を続けたレーミゾフにとって、長年の「セクト研究」の成果であると同時に、敏感な時間・空間感覚の表出でもある。

## C 会場・第3ブロック

[35] 現代ロシア文学と「フェミニズム」について

前田 しほ [C-3 9:40-10:10]

90年代欧米でフェミニズム批評・ジェンダー研究が盛んに行われ、その影響は20世紀後半以降女性文学が質量とのみ充実する動きを見せるロシア文学研究にも波及する。ところがロシア本国の女性・女性作家、ソ連時代から引き続き「フェミニズム」嫌悪が強く、ここから欧米のフェミニスト＝研究者は、ロシアをフェミニズム的な後進国とみなし、両者の間には深い断絶がある。しかし

## C 会場・第4ブロック

### [39] ソヴィエト政府による公的記憶転換の試みとその挫折 「聖地」ソロフキから「矯正」ラーゲリへ

高橋 沙奈美 [C-4 13:00-13:30]

本報告の目的は、ソロフキ諸島をめぐる「公的記憶 (public memory)」の転換を、イメージの操作や、シンボルの書き換えによって、初期のソヴィエト政府がいかに試みたかを論考するものである。15世紀以来の伝統的な修道院がそびえるソロフキは、革命前、巡礼地として空前の大繁栄を享受していた。それが革命後に恐ろしい強制収容所に変貌したことはあまりに有名である。しかし、当局は当初、ここに新しい時代のシンボルを打ちたてようと試みていたのであった。1926年の映画『ソロフキ』、1929年のM. ゴーリキーや1933年のM. プリーシヴィンといった著名人の訪問、囚人による演劇活動や雑誌刊行などによって、当局は健全な社会主義者を養成する「矯正」ラーゲリとしてのソロフキ宣伝に努めた。本報告ではこの試みが最終的に失敗し、ソロフキが公的記憶から抹消を余儀なくされるまでの過程を明らかにする。

### [40] ソヴィエトプロパガンダポスターの政治性と芸術性 グスタフ・クルーツイスの場合

大武 由紀子 [C-4 13:35-14:05]

20年代初期、アヴァンギャルド芸術家、構成主義者として創作活動を開始した画家G. クルーツイス(1895-1937)は、第1次5ヵ年計画が開始された1927年を契機として主要な創作活動のフィールドをプロパガンダポスター、政治的モニュメントへと変化させていく。モダニズムの手法であるフォトモンタージュを大胆に用いた代表作シリーズ『5ヵ年計画の闘い』(1930-31年)以後、ポスター画家の第一人者となり、その主要な地位を獲得している。

政治芸術であるプロパガンダポスターは当然、政治的枠組みを与えられる。時代の転換点(第1次5ヵ年計画、社会主義リアリズムの定立)を経過するなかで、クルーツイスは自らの作風をどのように変化させていったのだろうか。政治的解決と芸術的解決をどのように図ろうとしたのだろうか。発表はそれらを彼の作品の中に見ようとする試みである。

### [41] ロシア特別教育における就学指導・教育相談のあり方をめぐって

白村 直也 [C-4 14:10-14:40]

本報告においては、ロシアを対象に以下の点に関して考察を展開する。つまり、現在のロシア特別教育において、初等教育学校入学に際しての就学指導と、入学後の教育相談の連携はどのように整備され、また現在どのような模索状態にあるのかという点に関してである。その際のキーワードとして「心理-医療-教育委員会」を提示し、委員会の現状を考察することによりその一端を解明すること目的としている。

本報告においては、上記の委員会の現状に関して1999年連邦法「健康上に制約を持つ児童の教育について」、2003年ロシア連邦教育省通達「心理 医療 教育委員会について」をもとに法令上の規定を考察する。また、2003~05年モスクワ州教育省、保健省による指令「発達に偏向を持つ就学前、学齢児童の検査に関する心理 医療 教育委員会の組織に関して」をもとに具体的な取り組みについて考察する。

ながら、ロシア女性の「フェミニズム」嫌悪を吟味すると、これは主に社会主義的平等政策への批判と失望であり、女性思想自体を否定するものではない。また、女性による文学作品は、女性の生活体験や身体感覚を書き込み、セクシャリティを表象する自己実現の場としても機能している。そこで、本発表は、ロシアの女性文学及び周辺の言説を、これ自体が独自で固有な現象であるとの観点から見直し、フェミニズム(内部でも多様な議論が展開している)の枠組み内で再検討する。

### [36] 1960年代の女性の散文について

高柳 聡子 [C-3 10:15-10:45]

「雪どけ」とともにロシア文学には、それまで封印されていた作家や作品が多く出版の機会を得た。その中には、女性たちの手によるソヴィエト時代の記録があり、それは回想、あるいは回想的フィクションというひとつのジャンルを形成していく。そうした作家の代表として、ナターリヤ・パランスカヤ、イ・グレコヴァの作品を中心に、ポストモダニズム前夜の現象を文学史の面から考察していく。

### [37] ジギズムンド・クルジジャンフスキイ『栞 Книжная закладка』研究

上田 洋子 [C-3 10:50-11:20]

ジギズムンド・クルジジャンフスキイは文学そのものをテーマとした一連の作品を執筆している。なかでも、『栞』(1927)は、文学作品を文字化することの意義を批判哲学的に問う『文字殺しクラブ』(1926)、および、現実世界にあって虚構世界のルールを固持しようとする人物を描く『ミュンフハウゼンの帰還』(1927-1928)という、文学を直接のテーマとする二つの中編のあいだに書かれた、極めて重要な短編である。この作品では、あらゆる些細な事物を物語のテーマにしてのける「テーマ・ハンター」と作者の分身らしき語り手が、文学の可能性について語り合う。「テーマ・ハンター」はプロットよりもテーマに重きを置き、物語を語ることで「もはや文学のテーマは尽きた」という考えを反駁しようとする。2005年に出版された『ジギズムンド・クルジジャンフスキイ作品集』第4巻の文学・演劇評論をあわせて、『栞』に見られるクルジジャンフスキイの文学哲学を考察する。

### [38] フョードル・ソロゲブ『創造される伝説』

近藤 英美子 [C-3 11:25-11:55]

ソロゲブの三部作『創造される伝説「Творимая легенда」』(1914)における楽園形象について考察する。

作品の主要なテーマは、地上における楽園創造である。その目指される楽園が、連作詩『マイルル星「Звезда Маир」』(1898-1901)に描かれた世界であると考えられる。

他の作品でも、主人公が、夜空の星や少女といった象徴を通して感知し、憧れる別世界が描かれている。この別世界は、連作詩のものとも三部作のものとも類似している。

ソロゲブの創作全体に及ぶライト・モチーフである、地上世界に対置されるこれらの別世界は、すべて、同じ一つの楽園形象である。そのことが示されているのが、三部作なのである。

楽園のモチーフに着目し、その形象そのものの描かれ方と、楽園と登場人物の関係のあり方を探る作業は、ソロゲブへの新しい接近方法を可能にすると考える。

## パネルディスカッション（2006年7月理事会への応募資料のままを掲載）

[ ] [企画責任者：楯岡求美]

### ポータブルな祖国：ユダヤ・ディアスポラの文化とスラヴ

ユダヤの人々は地理的な領域としての祖国から追放され、離散する歴史を生きてきた。移住先でも安定して定住することが許される状況は必ずしも保障されず、移動しながら世界中に拡散していくことになる。このようななかでユダヤというアイデンティティは宗教・言語とともに音楽やダンスといったリズムや、ユダヤ文化のイメージを視覚化する絵画として共有され、継承されてきた。いわば、ユダヤの人々は文化という形で見えない祖国を共有し、携帯し、世界中に拡散してきたとも言えるだろう。本シンポジウムでは、そのような創造的文化継承に貢献した人々のなかからスラヴ世界ともかかわりを持つ人々に焦点をあて、スラヴ文化の多様性に寄与したユダヤ文化について考察を行う。

司会：諫早勇一（同志社大教授：ロシア亡命文化論）

報告：

1. 赤尾光春（北大スラブ研究センターCOE 非常勤研究員）  
「継母ロシアへの片思い ユダヤ・ロシア文化関係史序説に向けて」
2. 樋上千寿（大阪大学 COE 非常勤研究員、オルケストル・ドレイデル主宰）  
「シャガールと音楽」( 絵画、音楽、ダンス)

コメント：

三谷研爾（大阪大学助教授・関西チェコ/スロバキア協会副会長）

\*ドイツ文学専修、専門はカフカ

安原雅之（愛知県立芸術大学音楽学部助教授）

\*専門は20世紀のロシア・ソヴィエト音楽

[ ] [企画責任者：木村 崇]

### ザミャーチン『われら』はいかにつくられているか

申し入れの趣旨： 個別作品とか個別作家、個別の研究論文など、ある程度限られた課題について、研究方法や解釈を異にする複数の研究者が同時に研究発表を行うことによって研究対象に含まれる問題を浮き彫りにし、フロアーも含めての討論の活性化と新たな研究方向の探求をめざすためにこのような形式の研究発表を行う。ワークショップやシンポジウムが「広がり」の方向を求めるのに対して、特定課題研究は「深まり」の方向を追求する。

司会：木村 崇（京都大学）コメンテーターを兼ねる

報告：

1. 川端香男里（川村学園女子大学） ロシア文学研究者の立場から
2. 宮本宗実（京都大学名誉教授） 数学者の立場から

発表形式：個別研究発表枠二つを連続してつなぎ、休憩時間もあわせた70分間を使って、二つの報告と討論を行う。

[ ] [企画責任者：野中 進]

### 「その後」のフォルマリストたち ロシア・フォルマリズム再考

1928年の時点でフォルマリズムは「もはや過去の現象として語られなくてはならない」、「フォルマリストの数だけフォルマリズムが存在する」と切って捨てられた（メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』）。だが近年、彼らの理論的・芸術的遺産の再検討が進むにつれ、研究者の関心は「その後」の彼ら、「フォルマリストの数だけのフォルマリズム」へと向かっている。本セッションでは、20年代後半から30年代にかけてのシクロフスキイ、トゥイニャノフらの文学論、映画論に焦点をあわせ、当時彼らが実際に何をを行い、また行おうとしていたかを検討する。その連なりの中では、たとえば「科学的誤謬の記念碑」（1930）さえ分水嶺というよりはひとつのパフォーマンスにすぎない。フォルマリズム運動の理論的・文化的含意を再考することが、どのようにロシア・ソ連文化研究に資するかを併せて論じられれば、試みの第一弾としては成功であろう。

司会：野中 進

報告：中村唯史（山形大） 佐藤千登勢（上智大他非常勤） 八木君人（早大院） 野中進（埼玉大）

コメンテーター：長谷川章（秋田大）

時間：90分

## 2. 7月理事会関連事項

7月の理事会は、7月22日(土)に早稲田大学戸山キャンパス第3会議室で開催されました。主な報告事項および審議事項は以下の通りです。

2006年度総会・研究発表会のスケジュールが決定されました。

広報委員に新たに柿沼伸昭氏が加わることが承認されました。

会誌の論文募集要項・執筆要項等の一部が改正されることが報告されました(第39号の論文募集要項は下記をご参照ください)。

## 3. 学会賞決定

7月22日におこなわれた日本ロシア文学会学会賞選考委員会で、第3回ロシア文学会賞の受賞者が、以下の2氏に決定しました。授賞式は、10月21日の総会時に行われます。詳しくは会誌第38号をご覧ください。

金子 百合子  
鳥山 祐介

## 4. 会員異動

入会(2006年7月理事会承認)事務局受付順

	推薦者		支部	研究分野
たかはし さなみ 高橋 佐奈美	望月哲男	越野 剛	北海道	ロシア近現代史
いのうえ とおる 井上 徹	桑野 隆	沼野充義	関東	映画史・ユーラシア文化研究
みやかせ こうじ 宮風 耕治	木村 崇	楢岡求美	関西	ロシアSF
こんどう ふみこ 近藤 扶美子	長谷見一雄	金沢美知子	関東	ロシア象徴主義
あかお みつはる 赤尾 光春	望月哲男	毛利公美	北海道	文化人類学・ユダヤ文化研究・イディッシュ文学・ロシア文学
かわむら あや 河村 彩	桑野 隆	浦 雅春	関東	表象文化論・ロシア美術
あきくさ しゅんいちろう 秋草 俊一郎	沼野充義	長谷見一雄	関東	ウラジーミル・ナボコフ
なんじょう ゆきひろ 南 條 幸弘	中澤英彦	匹田 剛	関東	ロシア語動詞の体

退会

中尾 裕子 箕浦 達二 吉田 征司

逝去(謹んでご冥福をお祈り申し上げます)

米原 万里 灰谷 慶三

## 5. 会誌編集委員会より

会誌「ロシア語ロシア文学研究」次号(第39号・2007年10月刊行予定)への投稿申し込みは、本年(2006年)11月末日が締め切りです。投稿希望者は、学会事務局宛に以下の2点をご郵送ください。

1) 論文要旨:A4用紙1枚(1,000字程度)

2) 氏名・住所(連絡先)・電話・FAX・メールアドレス:1)とは別紙に記す。

海外滞在中などのやむをえない場合に限り、FAX、メールなどでの申し込みを認めます。

この投稿申し込みは、今年度の学会報告をされたかどうかに関係なく、すべての投稿希望者に必要です。論文以外の原稿(書評、学会展望など)の投稿も歓迎します。

投稿される論文等はすべて査読審査を受けることになります。投稿申し込み締め切り後、各投稿論文等に対して査読審査員を決定し、委嘱します。

申し込みの段階で編集委員会が投稿をお断りすることはありませんので、申し込み後はすぐに原稿の執筆にとりかかってください。投稿論文等の提出締め切りは来年(2007年)1月末日(送り先は後日お知らせします)、審査結果は4月中旬に通知いたします。

投稿申し込みにあたっては、「日本ロシア文学会会誌規定」「会誌執筆要項」「投稿審査要領」(本誌表紙裏に掲載)もご参照ください。

会誌中の「学会報告要旨」掲載については、投稿申し込みは不要です。

会誌編集委員会

## プレシンポジウム会場案内

### 京都市国際交流会館

〒606-8536 京都市左京区粟田口鳥居町2番地の1

電話：075-752-3010（代） FAX：075-752-3510 メール：office@kcif.or.jp

ホームページ：http://www.kcif.or.jp



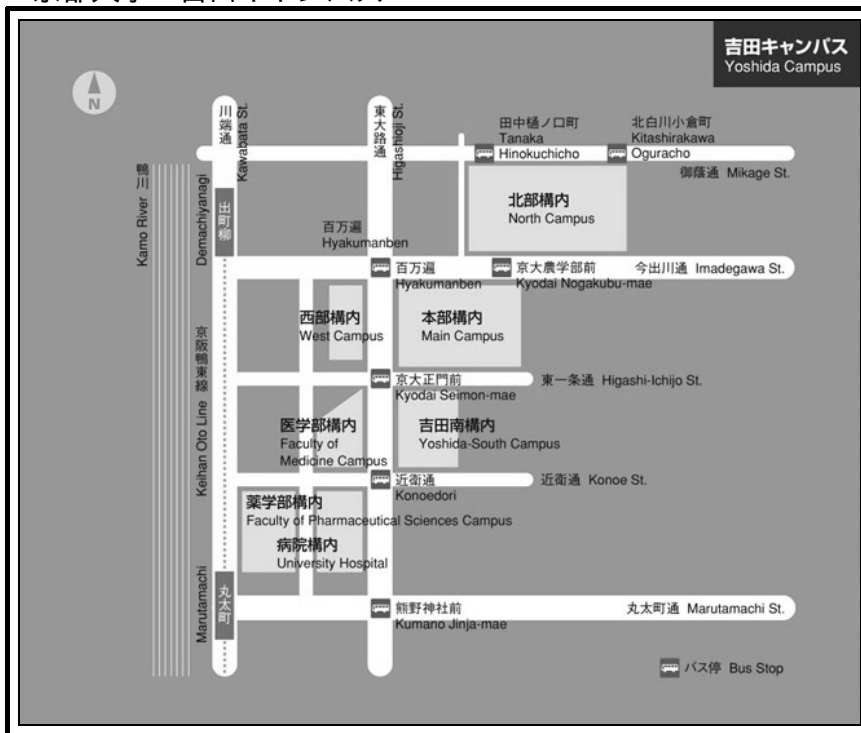
		下車駅・バス停			
京阪三条から	バス	市バス5・特5系統		京都会館美術館前バス停	徒歩10分
	電車	地下鉄東西線		蹴上駅	徒歩6分
四条河原町から	バス	市バス5・特5系統		京都会館美術館前バス停	徒歩10分
JR京都駅から	バス	市バス5・特5系統		京都会館美術館前バス停	徒歩10分
	電車	地下鉄烏丸線	<御池駅>	地下鉄東西線	蹴上駅

タクシーをご利用の場合、「蹴上（けあげ）の京都市国際交流会館」と教えてください。



総会・研究発表会会場案内

京都大学 吉田キャンパス



吉田南総合館（下図の右上方）



**懇親会会場**

懇親会の会場は、左図で吉田南総合館の北側、正門を出て東一条通を渡り、向かい側の北門に入ってすぐの百周年時計台記念館2階です。

## 交通情報

### 京都大学 吉田キャンパス

主要鉄道駅	利用交通機関等	乗車バス停	市バス系統	市バス経路	本学までの所要時間	下車バス停
JR / 近鉄 京都駅から	市バス	京都駅前	206系統	「東山通 北大路バスターミナル」行	約35分	近衛通 又は京大正門前
			17系統	「河原町通 錦林(きんりん)車庫」行	約35分	百万遍
阪急 河原町(かわらまち)駅から	市バス	四条河原町	201系統	「祇園 百万遍」行	約25分	近衛通 又は京大正門前
			31系統	「熊野・岩倉」行	約25分	近衛通 又は京大正門前
			17系統	「河原町通 錦林車庫」行	約25分	百万遍
			3系統	「百万遍 北白川仕伏町」行	約25分	百万遍
地下鉄烏丸線 烏丸今出川駅から	市バス	烏丸今出川	203系統	「銀閣寺道・錦林車庫」行	約15分	百万遍
			201系統	「百万遍 祇園」行	約15分	京大正門前 又は近衛通
地下鉄 東西線 東山駅から	市バス	東山三条	206系統	「高野 千本(せんぼん)北大路」行	約20分	近衛通 又は京大正門前
			201系統	「百万遍 千本今出川」行	約20分	近衛通 又は京大正門前
			31系統	「修学院・岩倉」行	約20分	近衛通 又は京大正門前
京阪 出町柳(でまちやなぎ)	徒歩	(東へ)			約15分	
	市バス	出町柳駅前	201系統	「祇園 みぶ」行	約10分	京大正門前 又は近衛通
			17系統	「錦林車庫」行	約10分	百万遍

\*JR 京都駅から : 市営地下鉄烏丸(からすま)線で「今出川(いまでがわ)」に出て、そこからバスかタクシーが便利(800円くらい)。

\*\*阪急河原町駅から : バスでも良いが、タクシーも便利(1,040円くらい)。

街が小さいので(混んだバスや電車を待つよりも)タクシーを利用するか、思い切って、徒歩で行く方が便利な場合が多い。

## ご注意

以下のような告示が会場の京都大学から出されていますので、ご注意ください。

### 工事現場にご注意下さい

会場の京都大学吉田南キャンパスの東側を中心に、耐震補強工事が実施されています。工事現場以外でも、車両の通行等、危険な場合も予想されますので、十分にご注意いただくようお願いいたします。

### 百周年時計台記念館臨時休館のお知らせ

平成 18 年 10 月 22 日（日曜日） 終日

（見学、京大グッズお買い求め等は、土曜日のうちにお済ませ下さい）

\* 高圧電源定期点検のため停電し、歴史展示室、レストラン「ラトゥール」、京大生協等関連する施設は、すべて利用できませんのでご理解のほど、よろしくをお願いいたします。正門西側脇のカフェテラス・カンフォーラも停電休業いたします。

## 昼食情報（当日会場においても情報を提供いたします）

《土曜日》		
* 徒歩 3 分 *		
カフェレストラン・カンフォーラ	正門内西側脇（左手）	11 時～3 時
ラ・トゥール（レストラン）	百周年時計台記念館	11 時～3 時
中央食堂	正門右斜め奥	10 時～2 時
* 徒歩 5 分 *		
ル・カフェ	東一条交差点北西、人文研の北隣、日仏会館内	9 時～7 時
クラークハウス（喫茶・軽食）	東一条交差点南西、春琴堂書店の西側	11 時半～2 時半
レストラン「しらん」	東一条交差点南西角斜めに入る	11 時半～8 時半
カフェテリア・ルネ	日仏会館の北側	11 時～8 時
* 徒歩 10 分 *		
ルヴェ ソン ヴェール（ピストロ）	ルネの北側	12 時～2 時
琢磨（和食）	百万遍交差点北西角	11 時 45 分～1 時
河道屋（蕎麦）	近衛通りの南側	11 時～7 時
《日曜日》		
カフェテリア・ルネ	日仏会館の北側	11 時～2 時
琢磨	百万遍交差点北西角	11 時 45 分～1 時
河道屋	近衛通りの南側	11 時～7 時
<b>コンビニ</b>		
ローソン	会場の地階	
ファミリーマート	東一条交差点の西側	
百万遍交差点にはファーストフード有り		

**当日の宿泊・食事等について（開催校よりのお知らせ）**

今回の総会・研究発表会については、宿泊の斡旋、弁当の手配はありません。

京都市内・市周辺には多数の宿泊施設がありますが、できるだけ早くに予約されることをお奨めします。

食事につきましては、大学内・大学近辺に飲食店・コンビニエンスストア等が複数所在しますので、随時それらをご利用願います（19頁に「昼食情報」を記載しています）。

**総会・研究発表会についてのお問い合わせは**

日本ロシア文学会事務局まで

電話：03-5286-3740      メール：jimukyoku-jars@list.waseda.jp

当日のお問い合わせは事務局長（携帯 090-8455-4165 源 貴志）までお願いします。

なお、当日会場受付では年度会費の取扱いはしておりません。会費は、この会報に同封された振込用紙にてお納め下さい。

**日本ロシア文学会会報 第30号**

（2006年9月1日発行）

発行人 井桁貞義

編集人 日本ロシア文学会事務局

〒162-8644

東京都 新宿区 戸山 1-24-1

早稲田大学文学部 露文専修室内